

進化は万能である マット・リドレー 早川書房

第10章 教育の進化

P250～262 担当：佐名木

○筆者の問題提起○

教師が試験に向けて教える義務教育が当たり前とされているが、学校の教室は若年者にとって学習に最適な場所なのか？

○筆者の主張○

→読書、観察、模倣、行動を1人もしくは友人と行うなど、学習方法は様々なものがあるが教育（常にトップダウンの活動）とは呼ばれない。

→自由を尊重するリベラルな人々が、5歳の子供を12～16年にわたって一種の刑務所のような場所に送り出すというのも少々おかしい話

○筆者の投げかけ○

教育が進化したとしたらそれはどういうものになるだろう？

プロイセン・モデル

(スティーブン・デイビス)

現在の学校形態はナポレオンがプロイセン王国を破った1806年に起源する説を唱える。苦汁をなめたプロイセンがフンボルトに意見を乞い、従順な兵士を育成することを目的として厳格な教育プログラムを策定した。

プロイセン・モデルの特徴

- ・習熟度別ではなく学年単位での教育法
 - ・教授法は形式的な講義形式
 - ・時間割はあらかじめ決められおり自由な学習ではない
 - ・一日に数教科を学ばせる
- 成熟した市民ではなく新兵を育てるのに適している。
→ナポレオン相手に戦う徴集兵候補に育てたいなら理にかなっている

プロイセン・モデルに関する例

アメリカにて

(アーチボルド・マーフィー)

→「国家は児童のために学校教育を提供すべき (略)」

(ホーレス・マン アメリカ公教育の父)

プロイセンを訪れプロイセンの公立学校を模範とすることを決意。公教育の目的は教育水準のためではなく、規律正しい市民の育成。

→Wikipedia のマンに関する記述

日本にて

(森有礼)

→「あらゆる学校の管理において、なすべきことは生徒のためではなく、国家のためであることを忘れてはならない。」

私立学校の締め出し

「イギリス」

他国と同様に国を運営する事務次官の育成のためプロイセン型の公教育を取り入れる。しかし 1880 年の公教育導入以前の 1818～1858 年にかけて私教育が発達。

○筆者の主張○

→イギリスでは、国家主導型の義務教育が貧しい人に教育を受けさせる唯一の方法だと多くの人が信じているが、実はアメリカと同じく事実はそうでなかった。

○筆者の根拠○

1880 年に義務教育が法制化されたとき、15 歳の子弟の 95% が以上がすでに読み書きできた。これは家庭、教会、共同体で自主的に行われた教育の成果。

→政府からの指示がなくても教育制度そのものがすでに自ずと進化していた。

「インド」

1820 年代の調査でイギリスがインドに公教育を導入する前にインドではヨーロッパの一部の国より多くの男児が私教育を享受していたことが判明。

(マハトマ・ガンディー)

公教育の導入により以前より識字率の低い国になったことを指摘。

(エドウィン・ウェスト)

イギリスにおいて公教育が健全な私教育の芽を摘み取ったことを指摘。

×フォースターの教育法→大衆紙の出現

◎大衆紙の出現→私教育の発達→フォースターの教育法

(W・E・フォースター)

国家による万人のための無償の義務教育を目指していたわけではなく、私教育に深刻な問題があると思われる場合にのみ国が介入し、保護者は教育にしかるべき代価を払い、どの学校に子弟を入学させるかについて選択権を持つべきだと考えていた。

→しかし、実際には国はほぼすべての教育を国家事業とみなし、誰が何を教えるかのみならず、どの児童がどの学校に通うべきかまで決めるようになった。

○筆者の主張○

→教育が1870年以降も民間にとどまり、教育費を払えない人々のために国が奨学金を与えたとすれば、教育制度は拡張し進化したはずだし、イノベーションと競争によって実際と同じくらい、ことによるとより早期にカリキュラムと教育水準が改善していたはずだった。

ところが、ろくに教育が行われていなかったところにイギリスが国として介入し、それ以降の世代が教育を享受したという神話が生まれた。

→国家主導の教育水準が低下し、公立学校の生徒を優秀な大学に受け入れる積極的優遇措置を求める声が上がっていることや私立学校がオックスフォード大学やケンブリッジ大学に優秀な若者を多数送り込んでいることから神話を否定。

○筆者の推測○

教育提供の国営化によって貧困層は収入を他のものに回せるようになるとはいえ、これらの人々の社会移動は少しも促されておらず、それどころか正反対の結果を生み出しているかもしれない

教育のイノベーション

教育の質が私立学校>公立学校なのはイギリスに限った話ではない

(アンドリュー・クルーソン)

「教育の市場と独占」に関して行った国際的な研究調査において、各国内で比べても各国間で比べても

→「大多数の計量経済学的研究は、私教育に比べて公教育は見劣りすることを示している」

と判明。

(ラント・プリチェット)

調査により、公立学校の多くでは教育水準がいたって低く、ほとんどすべての場合にこれに中央集権的な手法が関わっているという衝撃的な結果が出た。

クモとヒトデの例

クモ=中央集権的→クモ型の教育制度 ヒトデ=局所的で分散的

クモ型の教育制度がデザインされたのは国家を正統な政権に仕立て上げようとする試みの一環だった。

→この中央集権的な体制は、今日教育が直面する問題やイノベーションにまるで役に立たないばかりか、有害ですらある。

プリチェットの提案する解決法

→多様性と実験精神を重んじる教育体制を各地で進化させること、つまり、教育をもっとヒトデのようにすること。

○筆者の主張○

→国営教育がもたらした真の悲劇は、イノベーションがまったくと言っていいほど見られないこと

→教育は暮らしの他の側面ほどテクノロジーの恩恵を受けていないと感じられる

(アルバート・シャンカー)

公教育は生産性に対する報奨がほとんどない官僚制度であると指摘

→公教育が計画経済のように運営されていることをそろそろ認めるべきだ。

筆者→「進化による教育改革の動きは出てきている」

以下教育改革の例。

(ジェームズ・トゥーリー)

インド、ナイジェリア、ガーナ、ケニア、中国を含めた国々の極貧スラム街や僻地の村落に低額私立学校が多いことを発見。

Ex) ハイデラバードにおける世界銀行の調査→私立学校の教育の質は素晴らしかった。それに対し公立学校の教育の質は低かった。

世界銀行の同僚の低額私立学校に対する見解

私教育は貧しい人から金を巻き上げようとするビジネス。

私学校はたいていその地域の裕福な人々の子弟を受け入れていて、その地域の他の人々にとっては望ましくない。

→事実は異なりハイデラバードのピース高校では極貧や無学の人の子弟については学費を割り引いたり、無償にしたりしていた。

* 貧しい家庭の親がなぜ子を私学に通わせるか *

→公立学校では教員が欠勤したり、出勤したとしても教え方が悪かったりするから

(ジェームズ・トゥーリー)

低額私立学校の存在は当局＝政府に無視されていることを指摘。

→当局は公教育の拡大こそ貧しい人々の救済になるという立場を変えていない。

誰もが認める解決策はトップダウンによるもの

Ex) (アマルティア・セン)

→政府はもっと金を出すべきだと主張

筆者→学校教育を下から生み出すべく働きかけることが出来るという教訓は忘れ去られ、それは上から押しつけねば始まらないという考えが世間では支持された。

* 節のまとめ *

・公立学校では官僚が主権を握るため、成果主義はうまくいかず、イノベーションが起きずに教育が腐敗する。

Ex) 世界銀行の報告

・私立学校では消費者が主権を持つため、その需要にこたえて質の良い教育へとなってゆく

コメント

教職課程を取っているなのでこの章にはより関心を抱いた。ここまで公教育を批判されるのは逆にすがすがしい思った。確かに首都圏では学校の他に塾に通うのが当たり前であるし、明らかに塾に通った方が学力はつくと思う。また有名進学校には私立高校が名を連ねているのも事実だと思う。ただ、紙面で紹介されていた低額私立があるのは発展途上国が主であり、日本において低額私立が成り立つのかどうか疑問に思った。

P262～274 担当：古森

教育のテクノロジー

- ブリッジ・インターナショナル・アカデミーズ理念…その地域の教員の質によって教育の質が制限されてはならず、世界のどこでも最高峰の教育を享受できねばならない
- カーン・アカデミー…誰でも見られるハイレベルなビデオの提供
→地元の教師でなくても優秀な人から学べる
- ミネルヴァ・アカデミー…リアルな大学。授業は対話型セミナーとしてオンライン
スティーヴン・コスリン「講義は教えるにはもってこいだが学習には最適でない」
- 伝統的な大学はテクノロジーに押され50年後には姿を消すだろう
→セバスチャン・スランの講義
→壁の穴の実験…集合的で創発的な現象の発見
- ミトラ「現代のあらゆる物事がつながった世界では、特に何も教えなくても他の種類の学習も可能ではないか」→実験→自己学習環境(SOLE)の概念
- グラニー・クラウド…大半が退職者のネットワーク。村落や貧困街の生徒をオンラインで指導
難点…評価システム。記憶と暗記能力の試験である限り、自分で自分を教育することに意味はない。Ex.牛角湖

教化は終わらない

- 教育現場において特殊創造説流の思考を排し、進化を促さねばならない
→適切に行えば、教育は創発的な進化現象に
→一方でプロパガンダと教化の道具、つまりジョン・スチュアート・ミルが呼ぶ「心の支配」にもなり得る
- アンドリュー・モンフォード、ジョン・シェード…イギリスの2014年度カリキュラムは環境活動家になるよう説くもの
- 教化による耐性を植え付けるのに適した教育法…モンテッソーリ教育

経済成長を促す教育

- H・L・メンケン「公教育の目的が啓蒙であることはまずない。~中略~標準的な国民を育てて意見の相違や独自性をなくすことにある」
→イノベーションや教育の進歩が欠如していても権力者が憂慮しない理由
- 政府は教育を通じて経済的な競争力をつけることに執心
→高等教育は高収入につながる。教育水準の高い国は繁栄している
→教育は経済成長の絶対条件?…アリソン・ウルフ『教育は重要か?』では結論はノー
別の報告書では、職業教育は中央集権的かつ統制的
- 教育が個人の所得につながるのは明らかだが、経済成長が決まるわけではない
- 教育は経済政策がぶら下がったスカイフックではなく、創発的な現象

コメント

著者は本章の最後に「最高の教育が進化によって生まれ出るよう仕向け」や「教育を進化させようではないか。」と述べている。進化とは起こそうと思って起きるものなのだろうか。これまで文化の進化やイノベーションの進化では、進化は予想できないもので起こそうと思っても起きないものだと書かれていたと記憶しているので疑問に思った。